映画都市･京都における映画文化の生成と受容について

京都の映画文化における地域文化発信機能の形成と展開-

冨田美香（立命館大学大学院文学研究科助教授）

Abstract: As the representative media in the 20th century, the film art was formed and industrialized as the culminations of the historical and traditional industries in Kyoto, Japan.
Based on this process, our project aims to reveal the aspects of the formation and acceptance in Kyoto film cultures as the origin of Japanese films and picture cultures, as well as promote the archive activities of local film cultures by collaborations with the industries, government and municipal offices, regions, and universities.
Concretely, we focus our research interests on Makino film and Daiei Kyoto film studious that used to form the foundation and be a center of film cultures in Kyoto.
Moreover, we repeatedly research and collect the documents about the aspects of the formation and acceptance related to these studious, film staff and their works cooperated with film industries, official archiving, local civilians and film staffs.
Finally, we intend to share these report results as the property of local culture through the network and geographic information systems.
In this report, we are to report the characteristics of the pioneer days as the starting point of the film cultures in Kyoto which were revealed through our activities until March 2004, and the database establishment for the archive activities focused on Makino film and Daiei Kyoto film studious.

はじめに

20世紀の代表的メディアである映画芸術は、観客自身を表象する鏡であり、映画の受容行為は、観客一人一人が視覚的に世界を把握し、自らのアイデンティティを構成していく過程にほかならない。京都は、その映画が現実の街を大きく変貌させるほどのエネルギーを持ち、映画を地場産業化した世界でも稀な映画都市である。

本プロジェクトは、この映画文化の土台を形成し、日本映画の父と称された牧野省三が率いたマキノ映画と、戦後日本映画の最盛期を高度な技術力で形成し世界的評価を集めた大映京都撮影所とを主たる調査対象とし、映画文化の生成と受容の様態を明らかにするとともに、その成果を文化資産として共有することを試みている。

【図1. 本プロジェクトの大映京都撮影所復元図】

調査には、京都という都市の時空間が、映画の生成、受容、表象のそれぞれにかかわる“場”として立ち上がってくるダイナミズムに着目し、従来の歴史研究の時間軸に対する水平な視軸に、地域研究的な空間軸の視点を導入している。

本稿では、2004年3月現在までに調査を終えた京都映画文化の草創期に見る生成と受容の場の形成とその特色を報告し、次にマキノ映画と大映京都撮影所に関するアーカイヴ活動の中か

らデータベース構築と共有化について報告する。

1－1. 京都映画草創期　撮影所街の形成

京都の映画生成の場である撮影所街は、1930年代までに13もの撮影所が建設されたことによって形成された（図2参照）。

世界的にも稀な民力によるこの京都の撮影所街の形成は、遷都によって一地方都市になった京都府が都市アイデンティティの存亡をかけて推進した近代化政策に端を発している。この政策下に変容を遂げた伝統的地場産業出身者が、近代文化の産物である新興芸術の映画に着目し、その導入と普及に重要な役割を果したのであり、代表的な人物は、和菓子商出身の稲畑勝太郎と、嵯峨出身の材木運搬業・千本組の笹井三左衛門である。

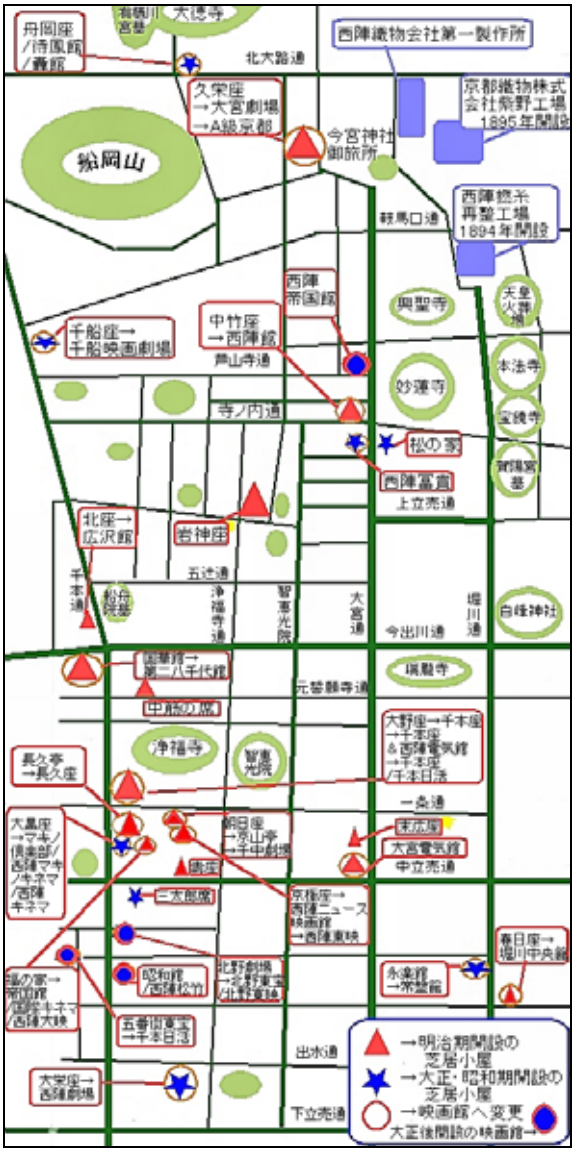
【図2. 京都洛西地域に設立された撮影所街】

後に大阪商工会議所会頭を務めた稲畑勝太郎は、近代化政策の一環である府費留学生としてリヨンで織物業を学び、帰国後伝統織物産業の革新事業へ身を投じて再渡仏し、留学時代の友人リュミエールの発明した映画（シネマトグラフ）を京都に持ち帰ったことから、映画の伝来者として映画都市・京都の端緒を切った人物である。その映画が、京都の新しい地場産業として定着していく際に、強力な後援者となったのが、西高瀬川を使った丹波産材木運搬業から、山陰線開通前の二条駅前・千本三条に居を構えて運送・土木業者へと転身した千本組である。千本組は同じ千本通に芝居小屋を持つ牧野省三と関係をもち、京都初の横田商会撮影所（俗称二条城撮影所）や京都映画産業の核となるマキノ映画、日活太秦撮影所などに、土地や資材・人材を含め支援したといわれている。

京都の近代化政策には、無用の地を開いて地産を盛にするという方針があり、それは洛外であった未開の洛西地域に敷設された嵐電沿線にそって続々と撮影所が作られ、映画が洛西地域の新しい地場産業となっていった文脈と共鳴するものがある。明治期の京都は、交通メディアの増加、都市空間の変容、毎年開催されていた博覧会などまさに近代的視覚の坩堝と化しており、これらへむけられた京都の人々のまなざしが新興メディアの映画へと集約されていった感がある。こうして京都に根付いた映画は、擬似旅行体験機能とともに、京都の都市景観や美術工芸、伝統産業などの職人芸に裏付けられた作品を続々と送り出し、京都という都市そのものを魅惑的な表象空間へとかえ、観光都市・京都のアイデンティティを再生産する重要な機能を担ったといえるのである。

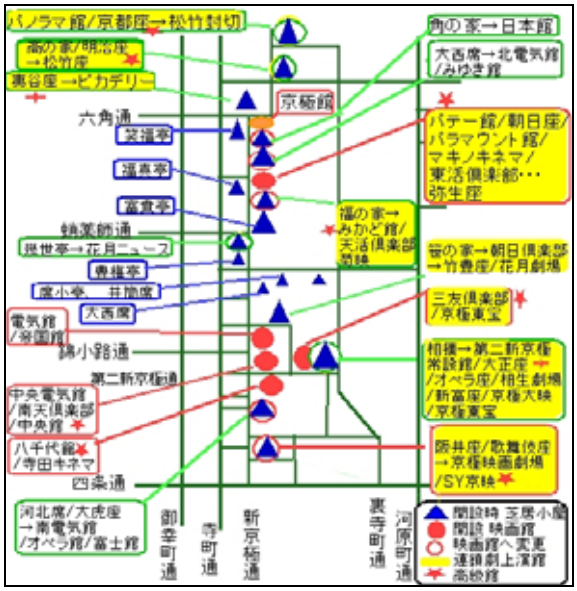
1－2. 京都映画草創期　映画館街の形成

そのような映画文化の受容の場である映画館街は、大正から昭和初期にかけて、芝居や寄席の興行場から映画常設館街へと姿をかえることで形成された。京都の代表的な映画館街は、西陣の労働者層の歓楽街として形成された西陣（図3参照）地域と、学生やインテリ層に支持された新京極（図4参照）の二ヶ所である。



【図3．西陣地域の興行街変遷】

西陣地域の興行街は、牧野省三と、日本初の映画スター尾上松之助を創り出したことで知られているが、本調査では、その形成過程と劇場の変遷のみならず、この西陣興行街の形成に、稲畑勝太郎の会社をはじめ、日活社長となる横田永之助の兄･横田万寿之助や、昭和初期の映画産業に関係する高島屋の飯田政之助らが創設した撚糸工場が大きな原動力になった点が明らかになった。京都の伝統産業の西陣とそこに注がれた改革のエネルギーが、京都の映画文化を創出する原点であったといえるだろう。



【図4．新京極地域の興行街変遷】

また、京都の興行街の特徴として大正初期に全国の大都市で人気を博した連鎖劇が、京都においては隆盛を極めただけでなく（図4参照）、1914（大3）年頃から、京都を舞台にしたロケ映像を多用し、集客を計ったことがあげられる。京都を舞台とする演目を特徴とした代表的な連鎖劇団は、京都座の久保田清一座であり、新京極の中でも随一の人気を誇った。新聞紙上で宣伝された京都のロケ地は、長田幹彦らのいわゆる紅燈文学で描かれていた京都の代表的観光地と一致しており、四条から五条の鴨川附近、先斗町裏、宮川町裏、北野天神境内、清水、高尾、鳥邊山、琵琶湖や、嵐山温泉嵐峡館、嵯峨華岡別荘、大堰川堤防、渡月橋畔などであり、撮影日時も公表された。新聞読者は、事前に紙上で知らされたロケ地へ活動写真の撮影を見に出かけ、完成品を見に、劇場へも足を運んでいた事が伺える。当時、日活大将軍撮影所の劇映画では、市内のロケ撮影を公表しておらず、日常の光景が物語空間として現前するという映画都市の醍醐味を人々に喚起したのは連鎖劇であったと思われる。すなわち連鎖劇は、物語の再現性以外の映画的価値を顕在化し、地域表象自体をアトラクション化した点において、映画都市･京都の特徴を形成する役割を果たしたといえる。

2－1．京都映画文化のデータベース構築

本プロジェクトが構築しているマキノ映画と大映京都撮影所のリサーチ情報のデータベースは、それぞれ以下4種に大別できる（数値はいずれも2004年3月現在）。

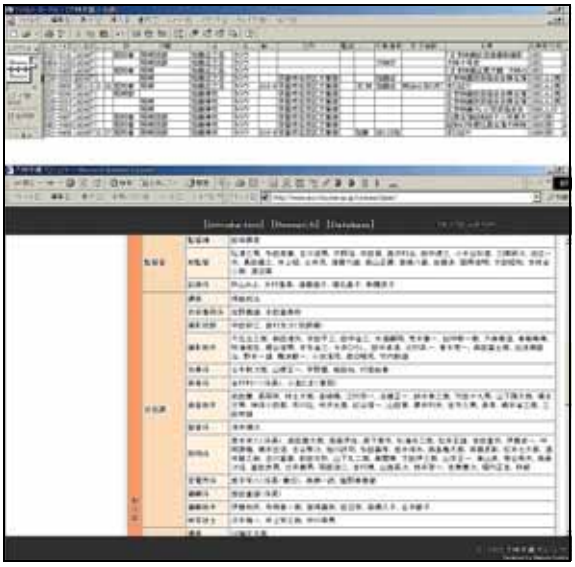
A. **映画作品データベース**（マキノ5000件、大映900件）

【図5．マキノ映画作品データベースのレコード】

B. **撮影所活動史データベース**（マキノ3000件、大映1200件）

【図6．大映京撮年表データベースとweb公開例】

C. **映画人データベース**（マキノ700件、大映6500件）



【図7．大映京撮人物データベースとweb公開例】

D. **資料画像検索データベース**（マキノ 1000件、大映4000件）

【図8．マキノ資料画像データベースweb公開例】

これらのうち、撮影所活動史とマキノ映画作品、映画人データベースは、調査収集した全情報を1出典1レコードとしてデータベース化している。調査収集活動に際しては、大映の権利所有会社である現・角川映画や、京都府京都文化博物館、マキノ映画や大映に関係した地域在住映画人の方々から、一次資料や映像情報の提供協力をいただいている。蓄積データの共有化に関しては、著作権や肖像権ならびに個人情報の問題から、一般用と研究用とに分け、前者は調査結果に基づいて作成した決定情報をweb上で公開し、後者は、権利保有者や資料提供者、共同研究者、フィルム・アーカイヴに限定している。データベースでは、映画題名や人名の変更にかかわらず同

一作品･人物を判別できるよう、映画作品と映画人個々にIDをあて管理しており（図7参照）、個人情報や制作談などの聴き取り調査結果もこれらのデータベースに蓄積している。

2－2. 映画文化の映像アーカイヴの構築

本プロジェクトでは、京都の映画文化に関連するテキスト情報や資料画像をアーカイヴする前述のデータベースに加えて、京都映画関連映像の発掘や映画人の聞き取り調査を記録した映像製作などを通して、京都の映画文化を対象にした映像アーカイヴの形成を試行中である。

この活動は、京都の映画文化を映像によって記録化し永続的な記憶として保存する目的と同時に、映像製作の視点を経る事で、映画生成のプロセスや映画人の視点に対する理解度を高め、映画文化に対する洞察力を深めることにある。また、このような映画文化の調査と並行した記録映像製作活動は、全国的に本プロジェクト唯一の試みといえ、京都のあらたな地域映像創出拠点としても、多くの映画関係者の協力を得ている。

現在までに、映像人類学の手法を導入しながら、大映京都撮影所映画人一人一人の制作談を主題とする記録映像の製作を中心に、尾上松之助と京都の関係を調査した紹介ドキュメンタリーやマキノ雅広シンポジウムのドキュメンタリー映像の製作を行ない、公開可能な作品については展覧会での上映も開催した。その結果、昭和初期の撮影所を映したフィルム映像の提供など、あらたな資料発掘へとつながっている。

本プロジェクトの今後の活動は、マキノ映画および大映京都撮影所に関するデータベースや記録映像をさらに充実させ、映画人を一次資料とした聴き取り調査を深化させると同時に、これらの蓄積データ（テキスト、静止画、動画）を関連付けし、草創期から最盛期の映画文化の様態を、京都という都市が“場”として立ち上がってくるダイナミズムも含めて視覚化したデジタル･アーカイヴの姿へと歩みを進めることにある。